

テオティワカン「月のピラミッド」発掘記 その3

愛知県立大学大学院国際文化研究科特任教授
杉山三郎

愛知県立大学とメキシコ政府の国立人類学歴史学研究所、アリゾナ州立大学の国際共同プロジェクトは「月のピラミッド」の大掛かりな発掘調査を1998年から6年間行い、内部のトンネル発掘で様々な埋葬施設や早期のピラミッドを発見した。その後現在まで、遺物の分析と出版準備で追われている。以下はその随想録3である。

発掘計画の準備

歴史を変えるほどの大発見は、往々にして偶然から生まれることが多い。古文書で語られていた幻のアステカ大神殿の発見も、偶然電気工事屋さんが掘った穴で石彫を見つけたことから始まった。密林に栄えたマヤ古代文明のパレンケ遺跡でも、ピラミッド神殿内部の床石につがいの小穴を見つけたことが、豪華な副葬品を伴う有名なパカル王墓の発見につながり、マヤ王朝史を大きく書き変えた。皮肉なことに、よく盗掘がきっかけで大発見となり、歴史解明に貢献したりする。テオティワカンでも、偶然見つかったものは多い。壁画、石彫などは、よく予期しないところから見つかり、その度に新しい解釈が出されている。

王墓発見が目的のひとつであった「月のピラミッド」調査では、内部から墓や奉納品が出土

する可能性はあったものの、その位置を予測するのが難しかった(図版1)。幅149メートル、奥行き167メートル、高さ45メートルあるピラミッドの中を約1m幅のトンネルを掘って探すのだから、偶然に頼るには、あまりに確率は低い。中はぎっしり土や石が詰まっており、数センチでも外れたら見つからない。

またテオティワカンで今までに王墓発見例がなく、そのピラミッド自体が内部調査されていないため、その存在を期待する裏付けもない。ひょっとしてあるかもしれないから掘ってみたいでは、とてもメキシコ政府の許可も降りない。調査の対象は国の文化遺産であり、世界遺産でもある。説得力のある調査計画書が必要だ。

そこで参考にしたのが、自身が80年代に内部調査を経験したテオティワカンの「羽毛の蛇神殿」ピラミッドと、テオティワカンの直接の影響が見られるマヤ宗教センター、カミナルフューのピラミッド調査記録だった。類似の建築パターンが見られるこれらのモニュメントでは、その中心や4隅、あるいは中心軸上から、地山レベルで高位の神官の墓や生贄埋葬墓が発見されている。さらに、メソアメリカのピラミッドは、地上界を天上界・地下界と結ぶ聖なる垂直軸を成すという世界観を引き合いに出し、よくモニュメント内部の縦軸上に、特にマ



図版1 「月のピラミッド」全景（気球から撮影）。中段・上段の階段手前にトンネルの入り口が見える。

ヤの神殿ピラミッドなどで王墓が見つかったことも考慮した。

「月のピラミッド」内部の保存状態はよく、あれば見つかるはずだ。しかし、いざトンネル掘って見つからなくても、それは「無い」という重要なデータとなるし、さらにその盛り土から出土する遺物はピラミッドの改築史の理解に役立ち、年代測定の資料となる一などといった、見つからない場合の「弁明」も用意し、基金や発掘許可を申請した。

考古学の醍醐味

ピラミッドと墓に関して使える全てのデータを分析し、論理的に考えられる限りの手を尽くせば、それから先は運を天に任せるしかない。

運よく基金がとれ、メキシコ政府の許可が降りた時、まず「月のピラミッド」の正確な3次元図を作った。テオティワカン人は飛びぬけて

建造物の正確さに敏感な集団だったことは、長年の測量経験から明らかだった。それを基に南北の中心軸上にトンネルを掘っていった。そして、「偶然」ではなく、「幸運」にも5基の墓をその内部から見つけることができた。

すでに述べたように、何回も増築の度に生贄埋葬が行われたことが明らかになった。垂直軸も考慮し、正確に4-5期のピラミッド上層部の3D復元図をコンピュータ上で作成してその中心も掘り、ピラミッド上部・中位部からもそれぞれ豪華な副葬品を伴う墓を発見した。

あらゆる手を尽くしての推測、つまり我々の言う仮説を立てそれを立証するという、考古学調査のルーティーンな手順だが、それがうまくいったとき、考古学の醍醐味と呼んでいいのかもしれない。それも特に発見の学術的意義が高いとき、その味は格別である。

埋もれている意義あるモノを新発見する醍

醐味は、実は偶然の発見でも味わえる。しかし考古学の分野で我々だけができる、もっとぞくぞくする発見の醍醐味がある。それは遺物やデータを解析し、ある事実にとどり着いたときである。その為にはまず必要な知識や理論を学び、厳しい方法論や分析の技術を修得しなくてはならない。それからデータと組み合わせ合う年月を経て、ようやく得た結果の論理的解釈により初めて達成できる発見であって、偶然できる確率はほとんどない。

千数百年前の現場検証

例えば「月のピラミッド」内部の墓の中から発見された、動物骨や人骨の分析によって初めて明らかになる、先コロンブス期の生贄儀式の復元だ。(図版 2)

前に述べたように、鷲、ピューマ、ジャガー、狼、ガラガラ蛇など神聖な動物や多数の生贄体の発見は、それ自体が実にセンセーショナルな発見だった。しかし我々の地味な発見はそれからである。ちょうど刑事事件の後の現場検証と似ており、わずかに残る物的証拠で「何が起きたか」を復元するが、違いはそれが昨日の出来事でなく、千数百年前の現場検証であり、さらに特有な専門知識と技術、注意深い解釈が必要だ。

バラバラに朽ちた骨の破片をまず貼り合わせ、修復し、より完全な形に復元する。根気のいる仕事で、もちろん多くの動物種の骨の構造を知らなければならない。時間をかけてくっつけた骨の細かな寸法を測り、まず何の動物の骨か、また性別・年齢を同定する。骨に病気や外傷があるか、場合によっては顕微鏡で確認する。

鷲には足首付近の骨に擦り傷があった。長い間縛られていた跡だ。黒曜石のような鋭い刃物

で切りつけたようなかすかな跡もある。(図版 3)

これは鷲が飛べず、また危害を加えないように、足筋を切った時に骨までとどり着いた傷だと、その位置と方向から推測できる。捕獲されて、生贄の儀式までしばらく飼われていた証拠だ。同時に埋められた 27 羽もの鷲を、生きたまま瞬時に捉えたとは考え難い。長い年月をかけて捕え、飼育していたか、ブリーディングされていたのだろうか。

犬科、猫科の動物骨も大量に出土した。同様に砕けた不完全な状況だったが、丹念な作業を経て、その個体数と種類を同定する。ジャガーやピューマ、狼、コヨーテ、犬またその交配種の可能性もあり、その違いは微妙で専門家の資質が問われる。

その体の位置関係から、足が縛られていたことがわかり、また檻の跡も見つかり、生きたまま墓に運ばれたと想像できる。獰猛な動物でも死んでいれば、わざわざ檻に入れて運ばなくてもいいからだ。前歯がすっかりすり減っている。恐らく檻を長期間に亘り噛んでいたのだろう。

現在の動物園でも、同様の檻生活と前歯の消耗度との関係は明らかである。民族史資料も目を通すと、16 世紀のアステカの古文書にある動物園(飼育所)の絵とよく合致し、解釈の信憑性を高めるために参考になる。(図版 4)

要するに、どのデータをとっても、テオティワカンの都市内に大きな飼育場、動物園のようなものが存在していたといえる。おそらく国家レベルの大行事が行われる度に、特別の意味を持つ動物がそこから選ばれ生贄にされたのだろう。

そのうちの一匹のピューマの腹部には、まだ食べたばかりの兎の骨が消化しきれずに残っ

ていた。その骨の色から、煮込み料理と思われる。ピューマは最期の晩餐として、ウサギの煮込み料理を食べさせてもらい、生贄にされたのだ。聖なる動物に対する丁重なもてなしか、もうじき生贄となる淡い命に対するテオティワカン人の粋な計らいだろうか。

人間の生贄

では人間の生贄はどうだったのか？かなり強烈な血なまぐさい舞台が復元できるが、一部にとどめよう。2000年に発見した17体の頭蓋骨は比較的保存状態がよく、副葬品は伴っていなかったが骨に残るわずかな跡から、その儀式の様子が復元できた。随想録2に述べたような、惨い打ち首の状況が目には浮かぶ。しかし最後の発見となった5番目の墓は保存状態が悪く、詳細な骨の分析は困難を極めた。体は折り重なって、それも完全に程遠い保存状態で発見され、まず何体あったか見極めるのも容易でなかった。とても骨の傷跡が確認できたり、アイソトープやDNA分析に適するような状態でなく、正確な位置関係から推察するしかない。

プロジェクト・メンバーや応援に駆けつけてくれた友人研究者の根気のいる作業により、個体数は10体と確認できた。手足を縛られた状態で全て打ち首にされ、胴体だけが投げ捨てられたと、空間配置から推測できる。頭は他の用途で使われたのだろう。何の副葬品もなく、犠牲者を確認する手段もない。手足の打撲の跡から、戦士だった可能性が示唆できるだけだ。

一方、墓の中心に置かれた2体は完全であり、貴重な装飾品を身にまとい、座位で埋められていた。明らかに前述の10体とは階級差、または神への捧げものとしての重要度の違いが窺える。しかし手足は縛られていて、生贄の犠牲

者と考えられ、結局この二人も付随的な意味を持った供儀要素と推測できる。

では要の要素は何だったのか？ここではそのデータの記述や解釈は省くが、明らかに中心は黒曜石ナイフや神像、黄鉄鉱の鏡などの集中した副葬品セットであろう(本誌2号:152頁、図版3) これは暦や春分の日、また乾期(火)と雨期(水)のサイクルに関する意味を持つと考えられる。テオティワカン人が最も関心を持ったと考えられる宗教的世界観を表すための儀式であっただろう。

他の墓では通常、墓の中央には多くの奉獻品が集中するが、この墓6では中心部にスペースがあり、黒曜石の生贄用ナイフだけが見ついている。私は、ここで、心臓を取り出すか、先に述べた10体の頭を切断する儀式が行われたと考えている。ともあれ、その墓の中心は血の海だっただろう。今から約1750年前の出来事をここまでリアルに復元できたら、まさに考古学の醍醐味と言えないだろうか。

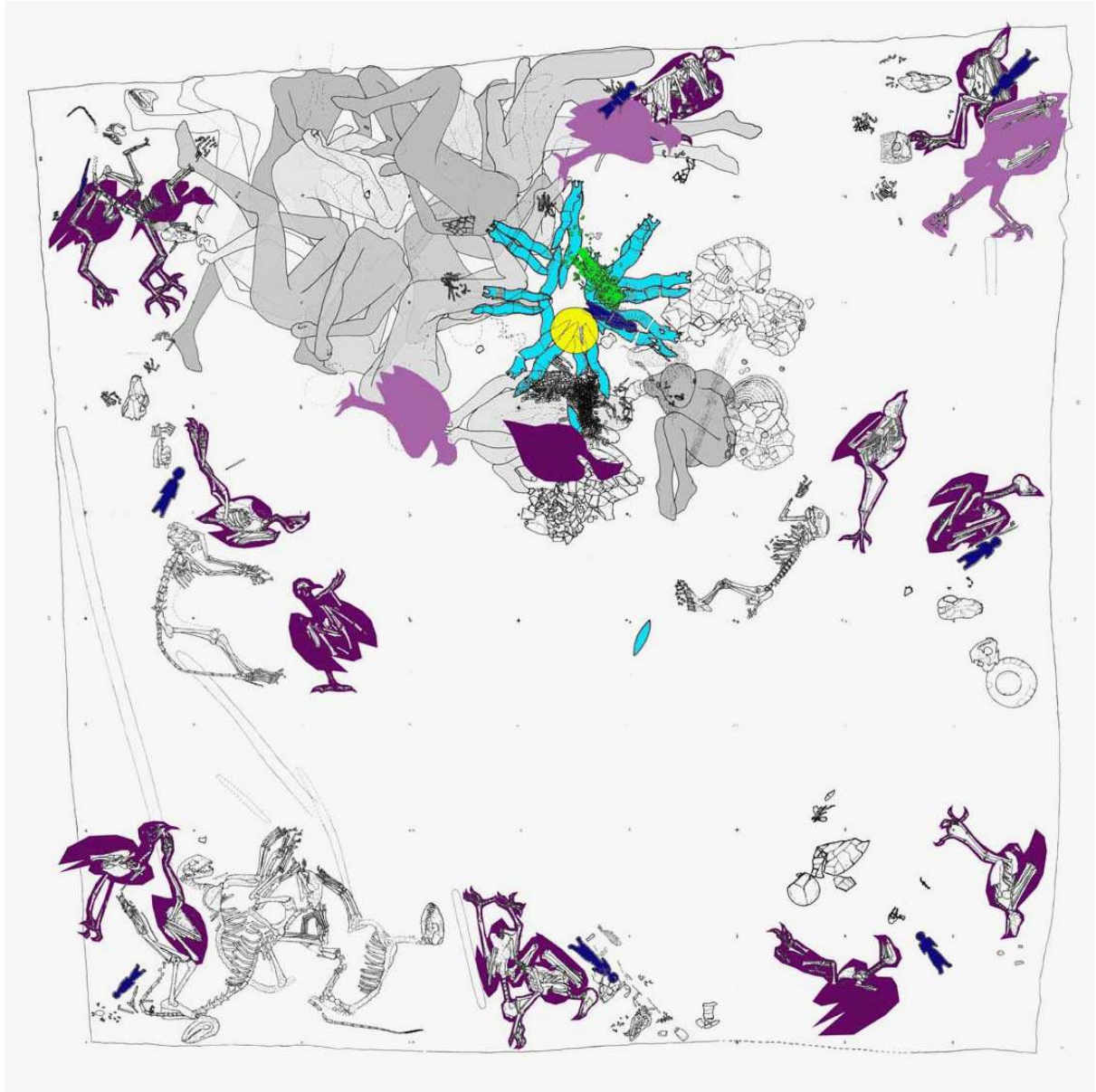
都市計画に組み込まれた世界観

計画都市に組み込まれた世界観の探求は私自身が始めた研究で、その成果が表れ始めた時の充実感は醍醐味を超えたものだった。長さの単位をひとつの分析手段としてデータを解析し、ピラミッドが単なる神殿の基壇ではなく、それ自体が古代人の「時」と「空間」のシンボルであったと具体的に「理解」した瞬間は、体の芯がジーンときた。専門的な知識に裏付けられた複雑なプロセスを経た成果であり、その感触は、なかなか理解してもらうことが難しい。

現場で墓の淵にたどり着いたと確信した瞬間にも、苦労を共にしてきた研究仲間となんともいえない醍醐味を味わった。類まれな副葬品

を実際に眼にしたとき、純粹にその場にいた仲間と抱き合っただけ喜んだりもした。しかし 30 年も暖めてきた課題が、様々な解析プロセスを経て解決できたときの喜びは、さらに格別のもの

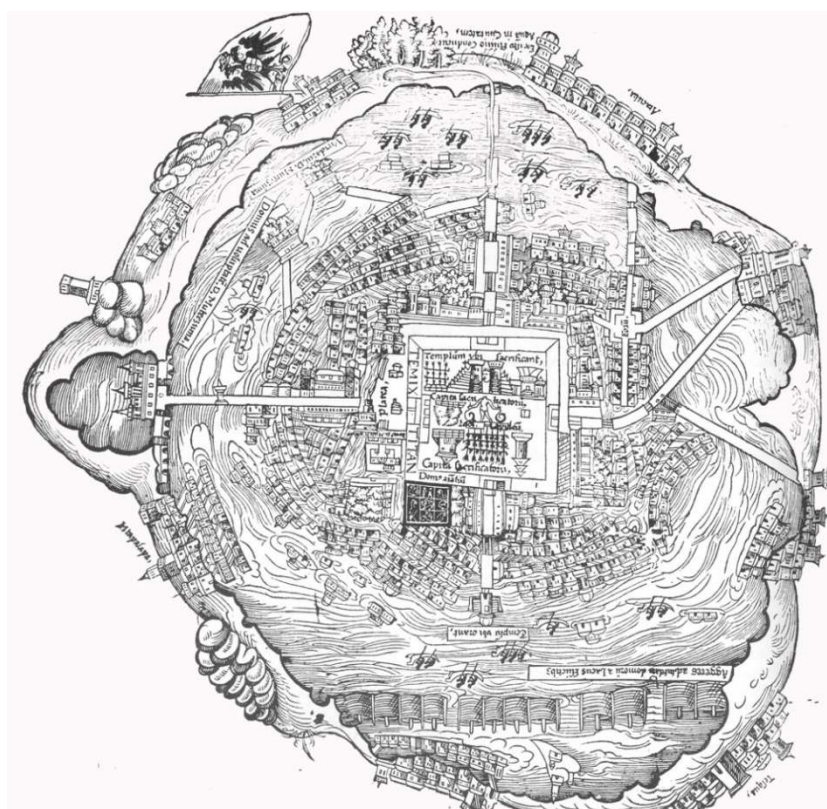
だ。たとえ辿り着いた断片が課題の極く一部であり、永久に完全な答えは出ないものだとわかっていても、まさしく専門的な研究ならではの醍醐味なのである。



図版2 「月のピラミッド」内部で発見された埋葬体2の平面図 50 体以上の動物や 12 体の生贄埋葬体が、大量の副葬品と共に発見された。



図版3 埋葬体6内部で発見された鷺の足骨にある傷跡。



図版4 メキシコ中央高原のテスココ湖中央部の湿地帯に造られた古代アステカ帝国の首都テノチティランの全体図。中央にテンプロ・マヨール大神殿の聖域、またその左下段に動物飼育場が描かれている。